

[史料]

# 商人ブルックルト・チンクの自伝の邦訳（1）

「ブルックルト・チンクの年代記」（1368 - 1468年）

山本 健

## Translation of a German Merchant's Chronicle in the Later Middle Ages Augsburg (1)

— *Chronik des Burkard Zink, 1368-1468* —

Takeshi YAMAMOTO

The purpose of this paper is to translate a German merchant's chronicle and autobiography into Japanese in order to study the mentality of the common people in the Later Middle Ages in Augsburg. This chronicle was written by Burkard Zing, who was born in 1396 in the south German town of Memmingen, and was edited by Ferdinand Frensdorff in 1866. This edition was titled in German: *Chronik des Burkard Zing 1368-1468*.

The main points in this translation are as follows.

- (1) Burkard Zing lost his mother in his childhood and he did not get along with his stepmother. So he ran away from home and went to live with his uncle, who lived a long distance away in Austria. But he did not get along with his uncle, either. So he was compelled to wander in the world as an orphan. But he never lost his dream to lead a successful life in those days. His dream depended on his skill of transcription, which he had learned when he had wandered in Germany until he was 18 years old. He had perfect confi-

dence in his ability to transcribe words. This kind of knowledge seems, therefore, to have been very important for the people of medieval days, as well as the people of today.

(2) The Zing's success always depended on a fateful encounter with some honest person who had backed him up at a turning point in his life. He gives an example. That person was J.Kramer. He was a long-distance trader. Zing had taken part in his Venetian trade. From this commercial benefit, Zing was able to invest in town properties.

(3) Zing was married four times and had a common-law marriage with a prostitute in 1449–53. He had led a miserable life for four years after his second wife's death. Then he was taken with a prostitute named Margret. She was a pretty girl, but she was in the habit of stealing money from him. Zing was conscious that her presence was very dangerous to him. So he legally dissolved his common-law marriage with her. Due to various circumstances in his early life, he seems to have been very vulnerable as regards women, as he became older.

## 商人ブルッカルト・チンクの自伝（1396 – 1462 年）

### 目次

- |     |   |
|-----|---|
| I   | はじめに——ブルッカルト・チンクについて                    |
| II  | 史料について                                  |
|     | (A) 15世紀のアウクスブルク市の『都市年代記』における『チンク』の位置づけ |
|     | (B) 『チンクの年代記』について                       |
| III | テキストの邦訳                                 |
|     | 第1部——第3巻の前半部                            |
|     | [A] 子ども時代——1396 – 1420年<br>前置き          |

〈幼児期〉

- (1) 母親の死 (1401年)

〈少年期〉

- (2) 父親の再婚と継母との不仲からクライン大公領に住む叔父の許へ (1404年)

〈青年期〉

- (3) 叔父との感情の行き違いとメミンゲン市の実家への帰還 (1414年)
- (4) 初恋と職人修業での挫折 (1414年)
- (5) 放浪学生チンクの誕生：  
遍歴時代の始まり (1414～19年)
- (6) 大都市での商業技能の修得
- (7) ジョス・クラマー商会での見習い奉公 (1419年)

〈以上、本号〉

〔B〕 新婚時代 (1420年)

〔C〕 クラマー商会での使用人時代 (1420～31年)

〔D〕 P・エゲンの許での使用人時代 (1431～38年)

〔E〕 モイティング商会への中途採用時代 (1441～44年)

〔F〕 宅地購入とその売却・転売 (1440～56年)

第2部——第3巻の後半部

省略

索引

〈以上、次号掲載予定、タイトルは暫定訳〉

(注記) ①訳文の〔 〕内の日本語は、理解を容易にするために訳者が補充したものであり、( )内は原語である。

②各章内の小見出しも、同様な趣旨から訳者が書き加えたものである。

③「自伝」(第3章)で断片的にしか記されていない内容で、第2巻や第4巻に詳細に記されている場合には、上記の趣旨から【補遺○】を書き加えた。

④テキストの(注)は一括して末尾に、各章ごとにまとめて記した。

⑤索引(人名、事項そして地名・国名)を注記の後に、独立した形式で付記し、掲載分冊番号とページ数を記した。

## I. はじめに

### ——商人ブルックルト・チンク (Brukhart Zing) について

まず、ここで邦訳しようとしているテキストは、『14世紀から16世紀のドイツ諸都市の年代記』<sup>(1)</sup> シリーズの一冊で、フェルディナント・フレンズドルフ (Ferdinand Frensdorff) が1866年に編纂した『アウクスブルク都市〔年代記〕』の第2巻「ブルックルト・チンクの年代記 (Chronik des Burkard Zing) 1368 - 1468年」<sup>(2)</sup> である。このチンクの都市年代記は、わが国でも、すでに阿部欣也氏が『一橋論叢 (1982年、87巻4号)』<sup>(3)</sup> で主張されていたように、「これまで良く知られていたにも拘らず、十分に利用されているとはいいがたい」状態にあった。そして今日でも同じ状態にある。

チンクについては、たとえば、『アウクスブルク都市事典 (1998年)』<sup>(4)</sup> によると、彼はメミンゲン市の商人の息子として1396年に生まれ、幼い時に継母との折り合いが悪く、クライン大公領 (Krain) で司祭職に就いていた叔父の許を訪れたものの、その叔父とも合わず、1419年まで不安定な流浪生活を送っていた。その後、チンクはアウクスブルク市でジョス・クラマー商会の商業使用人 (Handelsdiener) として雇用され、商人としての第一歩を踏み出す。そして1431年にP・エーゲンと出会い、さらに1441年にモイティング商会社主との出会いを経て、独自の資金を出資する立派な代理商 (Faktor) となり、1年間で100フローリン金貨を貯蓄するほどの収入を得る商人となった。さらに、1450年以降とは同市の下級役職を渡り歩き、経済的に裕福な中流階層 (Mittelschicht) に上昇した人物と説明されている。

確かに、上昇志向の強い庶民であったチンクの人物像を示すにはこの説明文で十分かもしれない。しかし、この説明には、チンクが記した当時の生活意識や家族を思う細やかな心性などは反映されておらず、まさに宝の持ち腐れであるといえよう。

また、訳者はこれまで中世後期から近世にかけて、ドイツ都市社会の市民の具体的な生活や意識を探ろうとして、アウクスブルク市民が記した『商人ルーカス・レームの日記（1494 - 1541年）』や『医師フィリップ・ヘーヒシュテッターの日記（1597 - 1635年）』を邦訳してきた。しかし、これらの筆者は当時の「エリート」層であったためか、人生を決定する青・少年時期については「イタリア（ヴェネツィア）やスイス（バーゼル）へ留学して教育を受けた」と記されているだけであった。したがって、庶民が自分自身の人生を決定する場合、子ども時代にどのような教育を受け、その後どのような人物と出会い、その人物からどのような影響を受けて職業を選択・決定していたのか、という諸点は依然として不明のままであった<sup>5)</sup>。これらの点に関して、本稿で邦訳するチンクの『年代記』は、貴重な政治・経済的な資料を提供するだけでなく、すでに阿部欣也氏が指摘していたように、当時の市民の結婚や暮し向きをも含めた日常生活の諸相とその変化、そして何よりも当時の市民の心性をも知りうる点で、改めて注目すべき史料と言える。

そのため、本稿ではまず、『チンクの年代記』のうちで、チンクという庶民の日常生活や心性が記されている「自伝」部分の全訳に努めた。

## Ⅱ. 史料について

### (A) 15世紀のアウクスブルク市の『都市年代記』における『チンク』の位置づけ

15世紀のアウクスブルク市の都市年代記の分野は実りある時代であった。この時代の諸作品の問題点を先取りして言えば、ツンフト（大工職）親方ウルリッヒ・シュヴァルツ（Ulrich Schwarz）の年代記を除けば、歴史的な出来事はたえず都市参事会〔ラート（Rat）〕の視点で解釈され、そして叙述されていることである。とはいえ、15世紀のアウクスブルク市の都市年代記は形式や内容の点で2つの世代に分けることができる<sup>6)</sup>。

## (1) 第1世代の都市年代記

第1世代の諸作品は一般に年鑑的なものであり、その形式は歴史的な出来事をただ列挙し、内容的には都市参事会に関わる公的な出来事に係わるものであった。

第1世代に属する年代記のうち、最も古い作品に属するものは、1368 - 1406年の出来事を記した『匿名の都市年代記』<sup>(7)</sup>である。これは、ツunft制度をめぐる対立から始まり、各年の政治的な事件、戦争、犯罪そして異常気象などを記した報告を15世紀初期まで編纂したものである。

第1世代の作品をもう一つ挙げるとすれば、豪商 (der begüterte Kaufher) エルハルト・ヴァーラウス (Erhard Wahraus) の、1126 - 1445年を対象にした『都市年代記』<sup>(8)</sup>である。この作品の特徴は、まず時期を1440年代にまで拡大させている点、さらに内容的にもフランケン=バイエルン地方の修道院の年報 (Klosterannalen) やマルチン・フォン・トロップパウ (Martin von Troppau) の世界年代記 (die Weltchronik) をも引合いに出して編纂されている点である。彼は確かに、都市史を普遍史 (Universalgeschichte) に組み入れようと努力したが、しかし彼の年代記の半分は1400 - 1445年までのアウクスブルク市で発生した出来事の報告に他ならなかった。

## (2) 第2世代の都市年代記

第2世代の年代記は15世紀中期からのもので、それ以前の古い作品を土台にして、その上に積み上げる形式で叙述され、内容的には全体的に個人的で私的な性格が強く反映されたものであった。

その代表的な作品の1つが商人『ブルツカルト・チンクの年代記』である。まず、この特徴として、確かに1368年のツunft事件から始まる古い『匿名の年代記 (1368 - 1397年)』と1401 - 1468年までの都市史の部分には「個人的な視点からの叙述」(eine persönliche Darstellungsperspektive) や「自伝」(Autobiographie) などが加えられている。とくに「自伝」では、チンク自らの青少年期とその成長過程、自らの職業活動、結婚と子どもたちの生と死などが綴られている。これらの点で、商人『ブルツカル

ト・チンクの年代記』は新しい型の年代記であり、チンクは新しい型の年代記作者といえる。すなわち、自らの生涯（Das eigenes Leben）を都市史と関連づけた点で興味深い作品となっている。ただし、チンク自身が同『年代記』の第4巻の冒頭で「私がアウクスブルク市にやってきた1415年以降にアウクスブルク市で起こった出来事の一部を記したい」（144ページ）と述べているように、アウクスブルク市の起源やその初期史について、さらに神聖ローマ帝国史との関連についてはさほど興味を引く内容は含まれていない。

これに対して、同じ第2世代に属する富裕な商人『ヘクトール・ミューリヒ（Hector Mülich）の年代記』<sup>(9)</sup>は1348 - 1487年を対象としている。それ故に、取り上げられている対象時期も『チンクの年代記（1368 - 1468年）』とかなりの部分で重なるが、初めの時期と終わりの時期がそれぞれ20年くらい長いのが特徴である。内容的には、『チンク』よりも客観的で、常に一定の距離を置いた立場から記されており、1440年までは簡潔な報告に終始していた。しかし、1460年以降の時期について、ミューリヒは経済力や閥閥の点でチンクと異なり、初めからアウクスブルク市の有力者（上級役人）であったためか、自ら収集した様々な原資料を基に自ら判断を下す「研究者」然とした態度で叙述した。そのため、この年代記には極めて多様な都市内部の諸問題と並んで、神聖ローマ帝国やその他のヨーロッパ諸国の発展に関する記録も含まれている。ただし、ミューリヒの筆致の視点はあくまでも都市上流階層のそれであり、『チンク』とは好対照であった。

最後は、自らの晩年に執筆したツンフト（大工）親方ウルリヒ・シュヴァルツ（Ulrich Schwarz）の年代記である<sup>(10)</sup>。彼はアウクスブルク市の財政職を担う役職に就き、下位ツンフトの構成員たちに、従来よりも強い都市政治上の発言権を与えるべく1462年に「政治改革」を試みたが、有力者たちの反対にあって1478年4月に処刑（絞首刑）された。そのため、彼の『年代記』は1462 - 1477年に限定され、潰された「改革」の弁明書と考えられている。内容は、その他のアウクスブルク市の年代記作者とは

異なり、アウクスブルク市を不必要な財政的困難に突き落とした市参事会の決定を弾劾する、という極めて個人的なものであった。

## (B) 『チンクの年代記』について

まず、『チンクの年代記』は全体として内容的にそれぞれ独立した4つの部分から構成されている。これらの部分を、同『年代記』の編者のF. フレンズドルフは、巻 (das Buch) と名づけた。これらの各巻には特別な前置きと結語なる所見がついている<sup>(11)</sup>。

ところで、チンクの誕生年について、「自伝」が記された第3巻には言及されておらず、第4巻の末尾 (313ページ) に、「父親から聞いた」という伝聞形式で、「1396年に生まれた」旨、記されている。

次に、チンクが『年代記』を執筆した時の年齢であるが、第4巻に以下のように記されている。すなわち、

「私が幼少から晩年までの私の人生について (von meinen leben, von meiner jugent und bis auf den tag meines alters) 執筆しようと決意したのは現在の1466年〔70歳〕である。そして私がこの年代記 (dise geschruft) を作り上げた年は私の晩年にあたる〔14〕70年〔74歳〕である。天に在 (ましま) す神に栄光あれ。また、私が三位一体の神〔父と子と聖霊 (die hailigen drei namen)〕の助けを得て、私の大罪を潔め、改悛し、そして贖罪することができるまで、私を生かし給え。」(第4巻：312ページ) と。

また、チンクが『年代記』で記そうとした内容と構想については、同じく第4巻に、

「私が①〔70歳の〕今 (nun)、どのように生活し、またどのように時を過ごしていたのか、(wie ich nun meinen leben gefuert und derzert han) また②私が幼少から晩年の今日、すなわち〔14〕70年〔74歳〕まで、どのように生きてきたのか、またどのようなことを体験してきたのかを (und wie ich gelept han und wes ich mich genietet han von meinen jungen tagen bis uff den gegenwurtigen tag meins alters, das ist 70 jar)、私は正直に記録しようと思う。」(第4巻：312-313ページ、①②と下線は引用者) と記されている。この点か

ら、チンクは下線部①の1466年〔70歳〕の現在の生活体験と、下線部②の幼少から晩年までの人生体験を記録するという2本立ての企画を、自らに課していたことがわかる。

ところで、各巻の内容であるが、まず、第1巻には「1368年（ツunft制度の導入）－1397年（間接税騒動）」までのアウクスブルク市の出来事が記されている<sup>(12)</sup>。第1巻の作成の過程については、チンク自身が第1巻の結語（53ページ）の中で、以下のように記している。すなわち、

「私ことチンクは、かなり以前にすなわち私が非常に若い時に1冊の古い小冊子『匿名の年代記（1368－1397年）』から書写した物を〔今日では〕遺失してしまい、またその内容そのものさえ記憶に残っていなかったので、今回は、ある老人が所有していた別な古書『匿名の年代記（1368－1406年）』を手本として、〔しかもその古書の内容をそのままそっくり採用したのではなく、自分のオリジナルな『チンクの都市年代記』に合うように〕少し改訂して（erneuert）記した。」と。

この改訂とは、F・フレンズドルフに従えば、チンクは古書の中の、気に入らない言葉や言い回しを換えたり、また簡潔な表現を長々とした言い回しに修正したことである。この点で、第1巻もチンクのオリジナルである、といえる。なお、チンクが最も恣意的に変更していたのが古書に記されていた日付である。こうして「書写され、そして訂正された第1巻は1466年〔70歳〕の夏（6月17日）に完成された」（54ページ）のである<sup>(13)</sup>。

第2巻は、チンク自身が体験し、また他の史料から集めた1401－1466年までの、多様なテーマの出来事から成る<sup>(14)</sup>。

たとえば、冒頭（57ページ）では1401年の皇帝ループレヒト〔在位：1400－1410年〕のアウクスブルク市への滞在を、また1413－24年までのアウクスブルク市での司教職をめぐる闘争（58－61ページ）を取り上げている。しかし、この闘争の叙述は詳細なコンスタンツ公会議〔1414－1418年〕の報告（61－66ページ）によって、さらに1409－1429年の多様な出来事（67－77ページ）についての長・短の報告（部分的に非編年体の形式で記載）によって、中断されている。そして1416年からは再び上記の闘争に關す

る叙述（77-87ページ）が再開され、最後まで中断されることなく記されている。この事件の後に、フス運動（1419年）と1431年までの運動弾圧行為に関する叙述（87-98ページ）が続き、その後、再び一連の個別的で、日付のない報告が詳細な表現で続く。たとえば、チンクが商旅で見聞した地方や都市と農村（104-105ページ）、さらにはヴェネツィアからロードス島の間にある島々（105-111ページ）などが記されている。そして最後に1459 - 66年の出来事（111-121ページ）が記されている。なお、F・フレンズドルフは第2巻が起草された時期を1450 - 1460年と推定している<sup>(15)</sup>。

第3巻は、チンクの「自伝」、とくにチンクの家族を主とした「家族年代記」（Familienchronik）である<sup>(16)</sup>。この第3巻は最も特徴のある部分である。チンクはこの箇所、中世後期の支配階級の視点からではなく、目覚めたが、しかし依然として控えめな市民の視点から当時の生活の現実を非凡な洞察力でもって明らかにしている<sup>(17)</sup>。

ただし、この第3巻では、3人目の妻の死亡（1459年）で終わっており、64歳のチンクが4度目の結婚（1460年）とこの若い妻との間に生まれた子どもたちへの言及は一切ない。これらは第4巻で言及されている<sup>(18)</sup>。

第4巻は、1416 - 68年までを含み、全体として編年体で記されている<sup>(19)</sup>。最も広範囲な内容と、他の1～3巻（1-143ページ）を集めたよりも多い分量（144-330ページ）を含んでいる。チンクはこの4巻の冒頭で、この巻を叙述しようとした意図を、次のように述べている。

「私がアウクスブルク市にやってきた1415年以降にアウクスブルク市で起こった出来事の一部を記したい。」（144ページ）と。

チンクは「目撃者ないし直接的な当事者（参加者）」という立場から記している。またチンクが関心を抱いた個人やその出来事（たとえばP・エーゲンの事件（196-206ページ）など）をその人物の生涯と関連づけて叙述したため、上記の編年体という原則から逸脱している部分でもある。

ところで、この第4巻が起草された時期については疑問が多く残るところである。

まず注目すべき点は、(1)第4巻の冒頭の数ページ（1416 - 1433年）の

出来事に、後代の、とくに1462年〔66歳〕の「新しい」状況を多数紛れ込ませて記されていることである。(2)本文が1416 - 1464年〔68歳〕の箇所(S.144 - 304.)まで続き、その後2年間〔68~69歳〕の空白期間を置いて、1466年〔70歳〕から再開されている点。(3)チンクが第1巻の結語(53ページ)で記していたように、第1巻が完成した1466年の夏には、「私(チンク)は、この第4巻の最後まですべて、〔1466年より〕かなり以前に書き上げていた(dasselb buech bis an das end han ich alles selb geschriben von weil zu weil)」という事実である。これら3点を考慮するならば、まず第4巻の冒頭の部分は1462年〔66歳〕頃から執筆され始め、そして少なくとも第4巻の1464年〔68歳〕までの部分は、チンクが第1巻を書き上げた1466年〔70歳〕の時にはすでにできあがっていたと推測できよう。そして、第4巻の1466 - 68年〔70~72歳〕の部分が『チンクの年代記』に後から加えられたと推測できる。

問題は、最後の1468年の箇所(330ページ)に「ここで、第4巻は終了する」(Hie hat das buech ain end)と——〈チンクはさらに6~7年間(1474/75年に死亡)生存していたにも係わらず〉——唐突に記され、終了していることである。これは、同時に、1466年の第4巻の312ページ〔本誌〇〇ページ〕で宣言していた『年代記』の構想のうちの下線部①〈チンクの70歳代の生活体験〉が打ち切られる恰好で終了することを意味する。

チンクは下線部①の企画をおそらく、1466年以降に再開された箇所でも叙述しようと計画していたのかもしれない。しかし、この企画は3箇所(313、327、328ページ)の叙述を除いて、断念されている。この原因は不明だが、参考になる事実を、チンク自身が不満を訴えながら、1460年の7月に4人目の妻アンナについて記していた。

「私が今、一緒に暮らしている私の〔4人目の〕妻アンナを娶った時、私は64歳であった。私はこれまでの全生涯の、すなわち幼少期から上記の晩年に至るまでの各時期において、多くの不愉快な事や嫌な事などを経験してきたが、〔最大のそれは〕今の、怒りっぽくて、そして反抗的な私の

〔新しい〕妻からのものである。……私は、そのため、この妻に、彼女の思うままに生活ないし行動させ、そして私は子どものために、何事にも耐え忍ぶことにした。〕(第4巻、313ページ)と。

すなわち、新しい4人目の妻アンナは老いたチンクにはかなり「不快な存在」であったようで、「怒りっぽく、かつチンクに反抗的な態度をとる妻」の許では、上記の企画、すなわち、チンクの70歳代の生活体験の執筆活動は実現困難であったものと思われる。

最後に、F・フレンズドルフの言葉を借りて整理してみると<sup>(20)</sup>、「この第4巻の執筆は50年も前から始められたものでもなく、また1468年に終了したものでもない。また、初めから編年体で順々に記されたものではなく、むしろ後から編年体の順で整理されたものである。」といえる。

〔付記〕 今回も「クリオの会」(千葉県船橋市の東部公民館および薬園台公民館での活動)で2012年4月から毎月1回、発表の場を提供していただき、訳文の分かりにくい箇所などを指摘して戴いた。この場を借りて、お礼申し上げます。

なお、「クリオの会」会員は名簿順に、辻和美、夏目智子、入江洵子、真野喜代子、小滝洋子、現田雅子、実藤康子、鎌田壽夫・順子、山崎富美、中島久美子、下田裕子、直原貴子、高村泰子、山下宏、北澤恵二、吉田継男、矢口知子、林ルミ子、溝口瑛子、宮田昭彦、元川多門の22名である(敬称略、2014年4月現在)。

### Ⅲ. 商人ブルッカルト・チンク(1396－1474/75年)の 第3巻『自伝』の邦訳

以下、ブルッカルト・チンクの第3巻『自伝』(Buch III)の邦訳である。

#### (A) 独身時代(1396年〈誕生〉－1420年)<sup>(1)</sup>

神の御名において、私ことブルッカルト・チンク(Burkhardt Zingg)は子どもの時期からどのように生きてきたのか、また何をめざして努力してきたのか、そして私がどうなったのか〔という自伝的内容〕を、この特別

な〔第3の〕巻で記そうと思う。

### 〈幼年期〉

#### (1) 母親の死

##### ◆1401年——筆者：4歳

私の愛する母親は、私が子どもであった1401年に亡くなった。神よ、母への慈しみを給わらんことを。アーメン。この時、私は4歳 (vier jar alt) であり<sup>(2)</sup>、さらに3人の兄姉がいた。ヨハネス (Johannes) とコンラート (Konrat) という2人の兄弟とマルガレート (Margret) という姉である。

それから、私の父親はブルツカルト・チンク (Burkhart Zing) と言い、この時、商人 (aingewerbig man)<sup>(3)</sup> で、〔オーストリア南東部の〕シュタイエルマルク (Steiermark) 地方で働いていた。父は財産を所持し、メミンゲン (Memingen) 市内のモンゴルト溝 (Mongolts Graben) の近くに家を構えていた。——〈父の家の隣には、ベッキン (Beckin) と言う寡婦が住んでいた。彼女は、その後、キプフェンベルク (Kipfenberg) と言う男と再婚した。〉——

その後、同所にあった私たちの父の家は、1人の蹄鉄工 (Hufschmied) に売却され、そして今では、日中、多くの鍛冶工たちが〔鞴 (ふいご) で熱い〕蹄鉄を作り、そしてそれに水をかけるなどして働いていた。私は、私たち家族がその家の中に居住していたことをしっかりと心に刻み込んだ。

### 〈少年期〉

#### (2) 父親の再婚と継母との不仲から叔父の許への出奔へ

##### ◆1404年——筆者：8歳

次に、その〔3年〕後の1404年に、〔3年間、鰥夫暮らしをしていた〕私の父親が、〔新たに〕1人の女性を妻に迎えた。彼女の父親はハンス・シュミット・フォン・クルムバハ (Hans Schmid von Krumbach)<sup>(4)</sup> と言い、有能な鍛冶工 (ain Schmid) であった。

この継母 (Stiefmueter) は若くして尊大であり、また私たち子どもに対して優しくはなかった。むしろ、冷酷であり、私たちを虐待さえしていた (übeltun)。しかし、このような継母ではあったが、しばしば〔一般的に〕若い妻が年老いた夫 (alten mann) に気に入られるように、私の父に愛され、そして気に入られていた。

◆1407年——筆者：11歳

〔さらに〕その〔3年〕後の1407年に、11歳の少年 (Jungling bei aifl Jaren) になっていた私は、すでに学校に4年間通っていた学生 (Schueler) でもあったのだが、〔継母との仲がうまくいかなかったため〕父親やすべての親族との交わりを絶って、1人の学生と一緒にメミンゲン市〔の親元〕を去った。私たち2人が赴いた先は〔私の叔父を頼って、メミンゲン市から南東に約350km離れた〕北イタリア (Windisch Land) の東隣に位置するクライン大公領 (Krain Land) のライスニッツ (Reisnitz) と言う市場町〔マルクト (Markt)〕であった。この市場町はクライン大公領のノイシュタット法域 (ラント) 裁判管区 (Landesgericht Neustadt des Herzogthum Krain) 内にあり、ライバハ〔現在のリュブリャナ (Laibach: Liubljana)〕の南東に位置する町である<sup>5)</sup>。

【補遺1】 メミンゲン市からクライン大公領のライスニッツ市までの約350kmの移動行程については、この第3巻には記載されていない。しかし、第2巻 (Buch II) の「私が元気であった時期に (bei meinen tagen) 行ったことがあり、そして実際に暮らしたことがあるすべての地域 (land)、都市と市場町、地方 (gegend) と村落 (dorfer) について記す」の箇所 (104ページ) に、以下のような記述がある。それによると、

「私は1407年に〔以下のような行程を辿って、クライン大公領の〕に赴いた。

(1) メミンゲン市からクライン大公領への入国までの行程

◎〔メミンゲン市〕→ ミンデルハイム (Mindelheim) → ランツベルク市 (Landsberg) → ミュンヘン市 (München) → ヴァッサーブルク市

(Waßerburg) 〈同市で私は病気を患い、同市から1/2マイル離れたライトヴァンク村 (Reitwang) に4週間逗留。その後〉 → [ザルツブルク市の北西部に位置する] ヴァーギング市 (Waging) → ザルツブルク市 (Salzburg) → ハライン市 (Hallein) → [ヴェルヘン (Werfen a.d. Salzach) → ビショップスホーヘン (Bischofshofen)] → [タウレン山の北斜面に位置する] ラートシュタット (Radsstadt) → ラートシュタット・タウレン山脈 (Tauren) を越えて [ケルンテン (Karnten) 地方へ] → [タウレン山の南斜面に位置する小さい市場町] マウターンドルフ (Mauterndorf) —— 〈ここから、2街道〉

[A] ⇒ カツェベルク (Katschberg) → グミュント (Gemund) → シュピタール・アン・デア・ドラバ (Spital a.d. Drau) → フィラツハ市 (Villach) 〈同市で私は市民トルッケンプロートの許に半年間逗留した〉 → そして、

[B] ⇒ ②フリーザハ (Friesach) → ザンクト・フェイト (St. Veit) → クラーゲンフルト (Klagenfurt) → そして、

クランベルク山脈 (Kranberg) を越えて → クライン大公領へ入国。

(2) クライン大公領入国からライスニッツ市およびゲッテニッツ村までの行程

[クラインブルク市の北西部に位置し、サバ (Sava) 川左岸の畔] ラートマンズドルフ (Radmannsdorf) → クラインブルク [現在のクラーニ (Krainburg/Kranj)] → ライバハ [現在のリュブリャナ (Laibach/Ljubljana)] → ◎ライスニッツ市 (Reisnitz) 〈私は同市で7年間暮らし、学校へ通った。また、ハンス・シュワーブ (Hanns Schwab) という市民の許に下宿していた。〉 ⇒ ゲッテニッツ・アン・デア・リーク (Götenitz an der Rieg) : ここは大きな村落 (Dorf) であり、1つの立派な教区 (Pfarr) である。この教区 [主任] 司祭 (Pfarrer) が私の叔父である (meins vaters rechter Burder) 」。]

〈青年期〉

### (3) 叔父との感情の行き違いと実家への帰還、その悲惨な結末

◆1414年——筆者：18歳

私は同公国に〔18歳に達する1414年までの〕7年間、滞在した。その間、私はライスニッツ市の学校に通った。それは、私の父親の身内たる叔父が〔ライスニッツの南東に位置する〕リーク (Riegg) という村の主任司祭に就任していたからである。この村は、たとえば〔リークの北西に位置する〕ゲッテニッツ集落やパウゼンブルンネン集落 (Pausenbrunnen) など5つの支村を含み、美しくて大きな本村であった。このリーク本村で、私の叔父 (Herr) は30年間、主任司祭職に就いていた。叔父はオルテンブルク伯フリードリヒ3世 (Graf Friedrich von Ortenburg) の奥方と一緒にこの地にやってきた。そしてこの奥方がその当時、彼女の書記 (Schreiber) であった私の叔父を司祭 (Priester) に据えたのであった。

この女性とは〔誰あろう〕テック家 (Tecke) の娘マルガレータ (Margaretha) であった<sup>(6)</sup>。同家はミンデルハイム大公 (die Herzogen zu Mindlhaim)<sup>(7)</sup> に連なる家柄である。同家の男系には、ウルリヒ〔1432年に死亡 (Ulrich)〕、上記のフリードリヒ〔1411年9月29日に毒殺〕そしてルードヴィヒ〔1439年に死亡 (Ludwig)〕の3人がいた。このルードヴィヒはその後長年にわたりフリウル (Friul) 地域で、総大司教 (priarchi: Patriarch) を務めた<sup>(8)</sup>。

私の叔父は私をライスニッツにある学校に通わせ、また私をハンス・シュワーブ (Hans Schwab) という誠実な人物の許に (zu ainem bidermann) 下宿させた。このハンス・シュワーブはオルテンブルク伯フリードリヒの〔御抱え〕建築士 (Baumaister) であり、この時、彼はオルテンブルクの家屋にさほど高くない館〔城砦 (Haus)〕を建設していた。

ところで、私がライスニッツの叔父の許に滞在していた7年間、叔父は確かに私を〔主人に紹介しようとするためなのか〕喜んで彼の主人の許に連れて行くなど、私に優しく接してくれた。〔事実〕叔父は私をウィーンにある上級学校 (die hohen Schuel)<sup>(9)</sup> に進学させようと考えていた〔節が見

られた)。しかし、私は〔上級学校への進学を〕望んでいなかったし、また叔父の意向に反して、〔そろそろ〕叔父の許を去ろうとさえ考えていた。すなわち、私は〔これ以上〕叔父の許にとどまろうとは思っていなかった。〔その旨を私から伝えられた時の〕叔父は私に〔対する態度を豹変させ、饒別のような〕贈り物を与えることは一切なかった。

すでに〔世間的には職業に就いている年齢に達していた〕18歳の私は依然として学生であったので、〔ひとまず、父親と継母が住む〕メミンゲン市〔の実家〕に戻ることにした。そして〔その途中で〕私は何を勘違いしたのか、「私はやはり父親の家を継いでメミンゲン市で暮らすように運命づけられた人物であり、また〔そのためにも〕立派な紳士 (ein Junkher) にならねば」などという〔青年にありがちな独りよがりで、途方もない〕考えを抱いた。〔しかし〕このような高邁な大望は (die Sach) 〔すぐに〕私が考えたのとは全く別な〔逆な〕結果になってしまった。というのも、私の父親も継母も共に生存していたし<sup>(10)</sup>、〔確かに〕私の兄弟たち〔ヨハンとコンラート〕は2人とも1408年に亡くなっていたものの、私の姉はすでに婿 (ein man) を迎えて〔家を継いで〕おり、私の父親とその他の親族たちは、母親の相続財産 (müeterliches Erbgut) をめぐって、私が手にする権利のある財産をも含め、全財産をすでに私の姉に与えていたからであった。

すなわち、私の父親が再婚した〔1404〕年に、父親によって私たちの母親の相続財産は分割され、私たち子どももそれぞれ、持分の財産を〔法律上〕所有した。〔ただし〕私はその当時〔まだ幼く、しかも1407 (11歳) - 14年の間〕クライン大公領 (Windischen Landen) にいる叔父の許で暮らしていたので、私の親族たちは「私がもはや叔父の許から戻ることはないであろう」と、すなわち、叔父が私を生計の立つように養育するであろうと〔勝手に〕考え、私の姉が多く〔の財産を〕所有するのが良かろうと判断して、姉に財産の多くを与えてしまっていたのであった。

このような状況下に戻って来た私は、〔本来ならば、同年齢の〕他の若い職人たち (Gesellen) より財産を多く所有する〔はずであった〕。しかし〔現実には〕私には財産は何一つ与えられず、また〔私のメミンゲン市への帰還

を) 喜ぶ者などは誰一人としていなかったのである。

他方、[メミンゲン市での「夢」が潰(つい)えた私が、前後の見境もなく、また何の先触れもなく]いきなり[叔父のいる]クライン大公領[のライスニッツ市]に再び戻って来たことや、さらに私が[叔父と喧嘩別れをして出奔したために、]叔父の許で成人しなかったことも、私を非常に不利な立場に追い込んだ。そして事実、私がライスニッツの町に戻った時、あたかも雷が[音を立てて]兜に叩きつけた時[に受けるような衝撃を]私は受けたのであった。すなわち、私の叔父は1415年に亡くなっており<sup>(11)</sup>、叔父の財産は彼の4人の実子たちやその他の人々に遺贈されてしまっていたのであった。つまり、私がおこなった[一連の]行為は無駄な結果に終わり、そして私にはただ疲れだけが残った。すなわち、1ヘラー(ein Heller)程度の財産さえ、私のものにはならなかった。私がこういう目にあっただけのも、私が叔父の許を出奔したせいであり、[よくよく考えると]当然のことであった(es war mir geschach recht)。私は[当てが大きく外れて]ほとほと参ってしまった。

#### (4) 私の初恋と職人修業での挫折

##### ◆1414年——筆者：18歳

[そこで]私は徒歩で(auf die Füeß)再び[故郷の]メミンゲン市に戻ったので、[一連の行為が]無駄であったことも手伝って、今はただただ疲れだけを感じる我が身であった。[帰郷したものの]故郷では、[上記のような理由から]誰もが私を歓迎しなかったばかりでなく、私の親族さえも私を受け入れようとはしなかった。[そこで]私は、ある[近郊の]村からメミンゲン市に[新たに]移ってきた[が故に、私をめぐるいざごぎの経緯を知らない]誠実な人物の許に身を寄せることになった。彼の許にいた1年間、私は彼に代わって彼の2人の子ども(Knabe)を学校に連れて行ったり、また子どもたちの教育を面倒みたりして[細々と]暮らしていた。

この時期、私は1人の少女(Tochterlin)に好意を抱き、そしてその恋心が募れば募るほど、学校に行くのがますます嫌になった。そして[とう

とう] 学校に通うことさえ気乗りしなくなり、[金の稼げる] 手工業 (Hantwerk) を学ぼうという気持ちが強くなった。これというのも、真面目な性格で、しかも裕福な織布工 (Weber) である私の義兄 [姉の夫] の仕事ぶりを [見ていたからであろう。] さらに、私は [義兄の許に] 出入りし、彼の許にいる徒弟 (sein Knecht) が恵まれた暮らしをしている様を見て、ますますこの種の仕事 [織布工] を学びたいと思う気持ちが強まり、学校通いを完全にやめてしまった。私の義兄は私を良く指導してくれたが、他の親族たちは私が織布工になることに異を唱えた。彼らが私に助言したことは「立派な、そして名誉ある職業」(ein guet und erber Hantwerk) である毛皮工 (das Kursnerwerk) になることであった。そこで私は [親族たちの助言を] 聞き入れて、メミンゲン市在住の、ジョス (Jos) 親方と呼ばれていた毛皮工——〈彼は後にケンプテン市門の守衛 (ein Wächter auf dem Kemptertor) となった人物〉——に弟子入りした。私は同親方の許で [初めの] 14 日間は大いに満足したが、[その後] 私は親方の許を辞した。[この件に関して] 親方には正当性 (recht) はなかった。そこで私は姉の許に行き、姉に「私はこれ以上、毛皮工のジョス親方の許に留まる気はなく、[一度諦めた] 勉学をもう一度励みたい」旨、申し出た。私の申し出に姉夫婦は賛同してくれた。なぜなら、とくに私の義兄は、私を [職人よりも] 聖職者 (ain Pfaffen) にさせたかったからである。

## (5) 放浪学生チンクの誕生：遍歴の始まり

### ◆ 1414 年 -

次に、私は [気を引き締めて] 立ち上がり、教科書 (Schuelbuch) を手に取り、姉夫婦に旅費の工面を懇願した。[その結果、なんとか] 私は姉夫婦からヘラー貨でちょうど 6 シリングの金銭を手にした。その金を持って私は同日 [直ちに、メミンゲン市から南西 35km に位置する] ①バルトゼー (Waldsee) <sup>(12)</sup> へ赴いた。そしてその日の夜、私は同地の施療院 (Spital) で一晩を過ごした。なぜなら、私は [旅籠などに宿泊する] 十分な旅費を持ち合わせていなかったからである。さらに、このバルトゼーの町で、私

は〔私に不利な〕噂を、すなわち、私が毛皮工のジョス親方の許を出奔した時に、同親方へ〔の違約金として〕ヘラー貨で7ポンドという大金を支払う義務が私の親族に発生し、彼らはその金額を私に年季奉公させて支払う旨、ジョス親方に約束した、という噂を知ったからであった。

そのため、私は翌朝早く起きると〔拘束を伴う年季奉公を免れるために〕このバルトゼーの町に長居することなく、直ちに〔バルトゼーから北に約20kmに位置する〕②ビーベラハ（Biberach）〔滞在期間：1年強〕に逃走し、同地ですぐさま1人の誠実な人（ein frummen mann）の許に身を寄せたのであった。この人物はかなり裕福な靴屋（Schuester）であった。しかし彼自身が靴を作っているわけではなかった（er treib das Handwerk nit）。彼は、神意を感じたのか、1年あまり私の世話をしてくれた。そのおかげで、私は学校へ通うことができた。ただし、私は食い扶持〔パン〕を自らの手で獲得しなければならなかった。そこで、私は同地では14日間学校へ通い、そして町を歩き回って〔生活の糧を〕乞食（こつじき）しようかとも考えた。〔しかし、まだ慣れていない私には実行は無理で、そのため、たとえば〕私が下校の時、自ら滋養のあるパン1個を1デナール〔ペニツヒ〕で購入し、そのパンを数個の小さなパン片に細かく切って〔それで日々腹を満たして〕いた。私が帰宅した時、私の世話をしていた靴屋の主人が私に「町でパンを探せたかね」と尋ねてきたので、私は「はい」と返事しておいた。主人はさらに「この町の人びとは、貧しい放浪学生たちの許に行って〔食事を差し入れするのが〕好きだからね」と語った。しかし、私は持参している金がすっからかんになるまでは〔町を歩き回って〕乞食などをしたいとは思わなかった。

〔このような暮らしを送っていたある日のこと、〕1人の学生が私に次のように語りかけてきた。すなわち、「〔ビーベラハから北東20kmに位置するドナウ河沿いの〕③エーインゲン市（Ehingen）には非常に立派な学校が1校あるそうだ。お前は俺と一緒に〔その学校に〕行きたくないか」と。私は〔彼の提案に〕賛同し、彼と一緒にエーインゲン市〔滞在期間：半年〕に赴いた。この町には大勢の放浪学生（Bachanten/Bacchant）がいた。彼らは全員パ

ン〔食い扶持〕を求めて町内を走り回っていた。私は、この件で、年長の学生たち (die alten u. die großen Schueler) がパンを求めて〔街路で〕歌い、かつ物乞いをしている現場に遭遇した。そこで私も彼ら〔に合流して〕一緒に歩き回り、〔その結果、仲間として〕受け入れられた。そこで、私は自分を含めて4人分もの (selb viert) 施し〔の分配量〕を求めた。〔この主張が認められたため〕私はこれ以後〔人をだますような無心企画を〕目論まなくても、食べるに〔困らない〕十分な量の食糧を手にすることができた。私はエーインゲン市に滞在して半年間学校に通った。この時、1人の年長の学生 (ein groser Student) が私に近づいてきて、私と一緒に〔エーインゲン市から西に約100kmに位置する〕④ヴァリンゲン市 (Vallingen)<sup>(13)</sup>に行きたくないか、と声をかけてきた。同市には非常に立派な学校があるそうだ。彼は〔おそらく、年長の学生として〕私が報酬 (Belonung) を得られるような立派な仕事に (zu einem guten Dienst) 就かせ、かつその助言を与えたいと思っていた〔にちがいない〕。そして彼は〔このような〕好意ある言葉をかけて、私の勇気を奮い起こさせたのであった。

〔そこで〕私は彼と一緒に、ホッヘンツォルから1マイル (1 Meil vom Hochenzoll) の所にある小都市 (ein klein stat) ヴァリンゲン市〔滞在期間：1年〕に赴いた。そして、私たちは同市に到着し、丸1年滞在した。同市で私は学校に通った。〔やがて〕私の相棒〔年長の学生 (mein Gesell)〕は私を見捨て、私に手助けも助言も与えなくなった。〔そのため〕私は一時、1人の貧しい、シュピールベンツ (Spilbentz) という鍛冶工 (Schmid) の許に身を寄せる羽目になった。私は〔お礼に〕彼の男児 (Knabe) を学校に連れて行ったりした。しばらくして私は旅籠の主人 (Gastgeben) の許に移った。この旅籠の主人から私は十分なる生活費 (Kost) をもらっていたので、物乞いをする必要はなかった。

その後、私は旅籠の主人の許を発って、〔ヴァリンゲン市から北東に約122kmに位置する、ドナウ河沿いの〕⑤ウルム市〔滞在期間：丸1年〕へ移動した。この都市では、私はある笛吹き〔フルート奏者 (Pfeifer)〕の許に身を寄せ、丸1年滞在した。この者はハンスリン・フォン・ビーブラッ

ハ (Hanslin von Bibrach) といい、同市に雇われた笛吹き〔笛手〕であった。彼は私に対して良くしてくれた。私は彼の男児を学校に連れて行き、〔これを、私の食い扶持の種とした〕。その後、この子どもも〔父親に倣って〕笛吹き〔笛手〕になったため、私はパンを求めて乞食して町を歩く羽目になった。

## (6) 大都市で商業技能の獲得に努めるチンク

### ◆1415年(?)<sup>(14)</sup>

次に、1415年に、私はウルム市から再び⑥故郷のメミンゲン市に戻った。しかし、義兄〔姉の夫〕は、私が〔以前〕起こしたメミンゲン市〔でのジョス親方の許からの〕出奔〔という事実と、その顛末〕を知っているので、私にアウクスブルク市に行つて〔そこで新たな人生を〕切り開くことを説き、また侍僧 (AcolithusB/accolitus) も私をメミンゲン市から退去させた。い一心から、私を説き伏せようとした。しかし私はその後も、短期間ではあったが、メミンゲン市にとどまっていた。

〔その間に、ある事件が発生した。〕それは、すなわち、ある貴顕〔アウクスブルク市参事会員〕がメミンゲン市を訪れ、到着するや否や真直ぐウルリヒ・シェーン (Ulrich Schön) という小間物商 (krämer) の許に向つた。この小間物商は豊かな商人 (ein reicher gewerbiger Krämer) でもあった。〔しかし、この貴顕が訪問してから〕数年で彼の商売は傾きだし、〔やがて破産して、とうとう〕零落 (おちぶ) れて〔貧困化して〕しまった<sup>(15)</sup>。

この小間物商の家に、私は1年間、身を寄せていた。〔この1年間〕私はまったく学校に通っていなかった。ただし、〔四旬節に先立つ3~8日前の〕謝肉祭 (Fasnacht)<sup>(16)</sup> の頃に1度、また聖ゲオルク祭日〔4月23日〕の時にも同様に、1人の男児を学校へ連れて行った。しかしながら、〔脛に疵を持つ身である〕私はその男児の親戚〔の目〕を恐れていたが、〔やはり、それが現実のもとになり〕メミンゲン市を去る羽目になり、⑦ニュルンベルク市へ〔逃げるように〕赴いた。〔メミンゲン市にとどまっていた1年間、小間物商の許に身を寄せていた関係から〕私はこの小間物商と一緒にバイエルン地方やそ

の他の地方の至る所の市場 (die Merkt) に連れて行ってもらった。

次に、私はニュルンベルク市〔滞在期間：3年間〕では、私は3年間クンツ・ベーハム (Cuntz Beham) と呼ばれていた1人の金持ち〔裕福者 (ein reichen man)〕の許に身を寄せていた。彼は名誉ある、有能な年老いた人物 (ein alt erber frum man) であり、塩市場 (Salzberg: Salzmarkt) <sup>(17)</sup> の近くにある聖母子教会の礼拝堂の1つの角 (かど) 近くの市場に居を構えていた。その屋敷には1本の鉄製の矢〔アーチ (eisen fail)〕が施されていた。また、彼にはシュルトハイス・フォン・ベルンハイム (Schultheis von Bernheim) という有能な男に嫁いだ一人娘がいた。娘の夫は乾草市場の向かい側の説教修道院 (Predigerklostr) の裏に居を構える裕福な人物であり、ワインの小売などもしていた<sup>(18)</sup>。

その後、私は⑧バンベルク市 (Bamberg)〔滞在期間：半年間〕へ移った。同市で、私はヨハネス・フランク・イム・バハ (Johannes Frank im Bach) という人物の許に身を寄せた。彼は教会法規〔を取り扱う聖界裁判所 (geistliche Recht) で〕の訴訟代理人 (procurator) であり、そのための旅館ないし料理屋 (Gastung: Gastwirtschaft) をも営んでいた。私は彼の許に半年間身を寄せていた。

その後、私は⑨ヴュルツブルク市 (Würtzburg) へ赴いた。同市に滞在していた時、食事〔処〕で味の良いワインを飲んだが、その1マース [1-2ℓ : (Maß)] の価格は1デナール〔ペニッヒ〕 貨ないし1ヘラー貨であった。また14マースのワインを1ベーメン・グロッシェン貨 (ein Behmisch) で声をかけて、売り捌いていた (man ausrufen)。

また、以下で知らせねばならないことは、私がヴュルツブルク市へ着いたまさにその当日にヴュルツブルク司教様が同市から出陣し、そしてその日のうちに再び同市に帰還されたことと、ある大きな村でゼッケンドルフ (Seckendorf) 出身の1人の貴族 (ein Edelman) の葬儀が取り行なわれたことである。その村は略奪され、農民たちが教会や塔の中にまで入り込み、そして教会や塔を、その中にいた400人もの人びと諸共に、焼き払っていた〔そうである〕。この噂は、その現場に参加したツヴィフェ

ル (Zwiffel) とライヒト (Leicht) という 2 人の傭兵 (Söldner) が〔避難所 (アジュール) たる〕宿屋 (Herberg) にいた私に語ったことである。上記の事件が発生した時のヴェルツブルク司教はバイエルン出身者であった<sup>(19)</sup>。

### (7) ジョス・クラマー商会での見習い奉公 (1419 年)

#### ◆1419 年——筆者：23 歳

次に、その〔4 年〕後の 1419 年に、私は⑩アウクスブルク市のジョス・クラマー (Jos Kramer) という富裕者の許に身を寄せていた。彼は同市では政権側の人物 (ein gewaltigman) であった。すなわち彼は同市の収入役 (Baumaister) であった<sup>(20)</sup>。しかも彼は織布工ツunft (Weberzunft) 出身者で、ツunft 市政府 [1368 - 1543 年 (die Gemain)]<sup>(21)</sup> の参事会員の 1 人であった。しかし彼は〔織布工ツunft の代表者ではあったが、実際には〕自らは織布を生産しておらず、さらには織布の取り引きさえ行ってはいなかった。〔今では〕彼はシュタイエルマルク産の毛皮の取り引き (Gefiell) やその他のヴェネツィア出身の商人 (Kaufmanschaft) との商取り引きをうまく営んでいた。彼はおそらく〔軽く〕100 ファーデル (Fardel) ほどの量のバルヘント織布 (Berchent) を所有していた。このため、私はヴェネツィア市やフランクフルト〔・アム・マイン〕市そしてニュルンベルク市〔などの各都市〕にある彼の支店 (Gewerbe) の経営に参加していた。彼は本当に有能な経営者であった。そして彼の、私に対する待遇は良かった。天に在 (ましま) す神の恩寵が彼に届きますように。そして彼の魂が救済されますように。アーメン。

〈以下、次号へ続く〉